

あなたのハウスもぶどう園に

～水稲育苗ハウスを活用したブドウ生産～

主任研究員 徳満 慎一（果樹研究センター）

1. 背景

富山県では、米に特化した農業構造からの脱却、地場産食材への県民ニーズ充足、経営体の体質強化等のため、主穀作経営の園芸との複合化を推進している。

そのため、水稲作業との競合が少なく、早期に収益が見込め、かつ初心者にも取り組みやすい品目・栽培体系が求められている。

2. 研究成果の概要

本研究では水稲育苗ハウスとボックス（根域制限）を利用し、従来どおりの水稲育苗を行いながら、ブドウ生産が可能である栽培技術を確立した。

1) 商品性の高い品種の選定

収量性が高く、旧盆需要期に収穫可能な品種は「^{ふじみのり}藤稔」である。

2) 樹体育成方法

①ブドウ苗木の植栽には、容量60L以上のボックスを用い、萌芽期（4月下旬）以降、追肥を窒素成分量1gで2週間おきに6回行うことで、目標樹形が形成でき、植栽2年目に結実可能である。

目標樹形：地上高1.6m 主枝長2.5m 短梢せん定樹

②植栽3年目から商品性のある果実が生産でき、4年目には成園に達する。

3) 商品性の高い果実安定生産

成園^{※1}時の「^{ふじみのり}藤稔」では、着果量を約 23 房/樹にすることで、目標果房を114kg/a(アール)生産できる。

目標果房：果房重 350g 以上、糖度 17Brix%以上

※1 収量が最大に到達した園

4) 経営試算

①成園時ハウス 1aあたり収支（品種「^{ふじみのり}藤稔」 植栽本数 12 本/a 生産者直売）

売上：136,800 円/a 経費：35,630 円/a

②導入時のハウス 1a あたりコスト：157,110 円/a

植栽 5 年目に開園以降の経費を回収。

3. 成果の活用

本成果を活用することにより、主穀作経営体等への果樹生産拡大が図られ、多彩で足腰の強い富山県農業に寄与する。

研究成果の概念図

1 背景と目的

富山県の園芸生産拡大

主穀作経営体の園芸複合化

水稻育苗ハウスを活用した
ブドウのボックス栽培を提案！

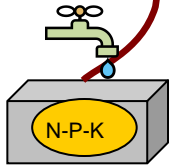
初心者にも取り組みやすい

Q 1. なぜブドウなのか？

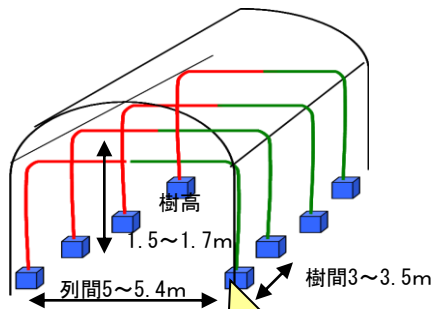
A 1 ①育苗作業は通常通り行える ②水稲作業との競合が少ない
③結実樹齢が若い(早期収益) ④ハウス利用による利点(減農薬、品質向上等)

Q 2. なぜボックス栽培(根域制限)なのか？

A 2 ①養水分のコントロールが出来る ②土壌条件を選ばない
③樹体をコンパクトに維持管理(ハウス内に収まる)④管理作業がラク



2 栽培方法



- ・アーチ状の主枝配置で、ハウス内の空間を有効利用
- ・短梢栽培で、わかりやすく省力的な栽培

こまめに灌水・追肥!

収穫作業

3 研究成果

1. 商品性の高い品種の選定

- ・収量性が高く、旧盆需要期に収穫可能な品種は「藤稔」である

表 ハウス・ボックス栽培における収穫期および果実品質

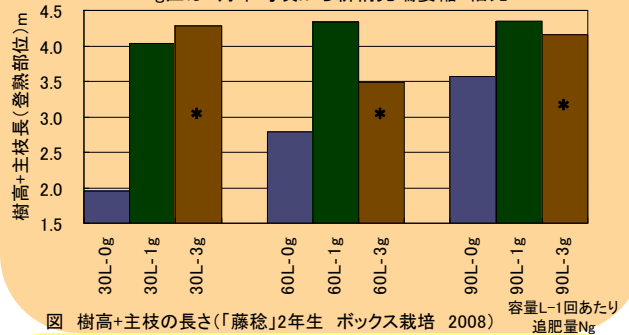
品種	収穫		平均果房重 g/房	糖度 Brix%
	始期	盛期		
アーリースチューベン	7/23	7/27	170	19.1
サニールージュ	7/28	8/3	155	18.6
藤稔	8/13	8/18	385	18.5
巨峰	8/20	8/24	241	19.6
ピオーネ	8/20	8/26	424	19.6
シャインマスカット	8/17	8/22	200	19.9
安芸クイーン	8/20	8/20	324	19.7

* 2009~2012年平均値

2. 樹体育成方法

- ・ボックス容量60L、90Lで生育良好
- ・植栽2年目で樹形確立、4年目で成園化

* 3g区は6月中旬頃から新梢先端萎縮・枯死



3. 商品性の高い果実安定生産

- ・成園時「藤稔」では、着果量が約23房/樹で、果房重350g以上の収量が114kg/aとなる

4. 経営試算

- ・成園時(植栽本数12本/a)
売上136,800円/a 経費35,630円/a
- ・開園費157,110円/a
→植栽5年目で累積収支がプラス

